

近世節用集書名変遷考

——一七〇〇年前後の転換期まで——

佐藤貴裕

はじめに

節用集には、室町中期から昭和初期までの長きにわたる歴史があるが、ことに江戸時代には大きな変容をとげた。その種々相を追う記述研究の一環として、書名の変遷に注目しようと思う。

編者や書肆には、みずから編集・刊行する節用集に固有の名を与える自由があった。しかし、実際には、禁忌をはじめとする条件や制約があったであろう。これは、人名の場合に照らしても容易に想像される。まず、節用集としてのふさわしさという条件があるろう。もちろん、「頭書増補節用集大全」のように「^(注1)節用集」という要素があれば節用集であることは明示できるが、それを修飾する「^(注2)頭書・増補」や、書名全体を受けて補完する「大全」などにもふさわしさは求められたであろう。また、商品である以上、購買欲をかきたてる必要があったろうし、新機軸が盛り込まれれば書名にも反映させたであろう。そして、それらは、ある程度の教養をもつ購買者に理解されなければならなかったはずである。表現したいという意欲と、容認され理解されるかという危惧との折り合いのついたものだけが書名として名付けられた、と原則的には考えられることになる。このように、書名にも、節用集をめぐる人々の営為をみることでできそうである。その意味で、書名研究には、組織・系統・収載語

等々の研究と同様、節用集の記述研究の一面を占める価値があると考えられるのである。

近世節用集は、さまざまな展開をみたので、それを記述するには、一つの座標軸としても時代区分が必要になる。もちろん、記述するにしたがって的確な時代区分ができるという面もある。結局、この往復作業のうちに円満な記述がなされるのであろう。そこで、暫定的にも節用集史を区分するとして、何が問題かといえ、区分の指標となる現象が十分にあるか、区分をめざした記述がなされているか、ということであろう。方言区画や日本語の時代区分では、どのような現象を指標とすることで複数の案がありうる。ところが、節用集においては、現象の数なり記述なりが選ぶほどにはそろっていないように思う。かりに、ある現象によって区分したとする。その妥当性を判断するにはどうすればよいのだろうか。ひとつには、その現象の変化する時点が、他の現象の変化する時点と一致するとき、そしてそのような現象の数が多いとき、妥当とする立場がありえよう。つまり、指標や区分を評価する道が一つひらける点からも、指標となりうる現象の数は多い方がよいことになる。したがって、我々が節用集に接して気づくすべてのこと^(注2)がらについて、指標になりうるかどうかを検討する必要もあることになる。その一つとしても、書名に注目する価値はあることになるのである。

一 資料・方法

資料には、佐藤（一九九六）の書名一覧を基本とし、脱稿後、新たに見いだしたものを含めた。^(注3)ただし、後述のような事情により検討対象は一八六〇年までに刊行されたものとした。なお、右におさめた書名は、原則として内題を示し、角書等を省いているので本稿もこれに準ずることになる。

右の範囲は、易林本節用集の跋文にある慶長二（一五九七）年から一八六〇年までの長きにわたるので、一々の書名を見ていったのでは大要を把握できない。そこで、諸本を刊年によって二〇年ごとにくぎり、当該の二〇

年間を他の二〇年間と比較・対照することとした。なお、対象の下限を一八六〇年とするのは、この二〇年単位を適用したためである。また、易林本とその再版本は最初の二〇年に含めた。

純粹に書名だけを検討するなら異なる書名だけをあつかえばよいので、再版本を検討する必要はない。が、時代区分を意識するならば再版本も含めた方がよさそうである。ごく単純に考えて、何度も再版される本は広く迎え入れられたものであろう。そのような節用集の書名は、広く人々に知られ、他の節用集を出版する書肆たちにも少なからぬ影響を与えるであろう。直接には、類似・近似の書名が増えるなどのことが想定されるが、それらの総計として、ある時期における書名の標準型なりふさわしさの基準なりが醸成される可能性もあろう。実際、書名を通覧すれば、そうした現象が存在するようでもあり、ならば、時代を区分する現象ともなりうるものである。こうした側面に対応するため、本稿では、初版・再版の別なく扱うこととする。

なお、基称ともいうべき〈節用集・節用〉や書名の長さについては別稿を準備中なので、本稿では、基称を修飾・補完する要素^(注4)について、大きな転換が見られる一八世紀はじめまでを見ていくこととする。

二 〈二体〉系の時代

一六二〇年までは単に「節用集」と称するものばかりだが、次の二〇年間に〈二体〉という要素が現れる。これは、見出し語の表示に楷書と草書を併記したことを示すものである。「二体節用集」には、元和・寛永初期にさかのぼるものや（柏原司郎（一九七三））、寛永三年刊本などがある。これらは、書名に〈節用集〉以外の要素を初めて採り入れた点で注目すべきだが、そうした形式面だけで重視しようというのではない。

実は、二書体表示の節用集は慶長一六年にすでに刊行されている。また、相前後して行書・草書一行表示の草書本・寿閑本（慶長一五年刊）・源太郎本（元和五年刊）も刊行された（山田忠雄（一九六四））。このように、近世

初期には特色のある節用集が刊行されたのだが、「節用集」と名付けられるだけだった。これは、古本節用集の多くがそうであるのを踏襲したか、あるいは「節用集」とのみ称するのが通念であったということなのであろう。当然のことながら、そのような書名からは、その書の特長・特色をうかがうことはできないのである。このことを踏まえれば、「二体節用集」という書名は、持てる特色を書名に反映させようとする意図が生じたことを示す一方、書名における古本以来の通念を打破したものと捉えられるのである。また、その意味では、古本節用集と近世節用集との境界をどこに設けるか、あるいは近世節用集のなかに古本の影響がどれほど認められるか、という大きな問題においても、相応に注目されるべきものと思われるのである。

このような形式的・質的転換は、やはり、出版事業の営利性とかかわるのであろう。柏原（一九七四）は「二体節用集」の「寛文三年板の内容が全く寛永期のもものと等しいのに、「増補」という角書を施す理由も、購入者に魅力を感じさせるためであつたろう」とされた。また「二体節用集は、易林本系の縮約本の内容を有する上に、後代の版種ほど文字が小さく、字詰もきつくなっている」と見、柏原（一九七七）では「同じ内容のものを、どう紙数少なく仕上げるかといった、経済性重視の改板が二体節用集に見られる」とされた。営利事業にふさわしい一連の営為が、ほかならぬ「二体節用集」諸本に認められるのである。そのような節用集が、近世刊本の節用集として初めて修飾要素を付した書名をもって登場したことは偶然ではなかったのである。

同じく一六二一〜四〇年の末には「真草二行節用集」により「真草・二行」という要素が用いられたが、その意味はともに「二体」に等しい。節用集での二行表示といえば、楷書と行草書が普通なので「二行」か「真草」かを示せば十分で、事実、一六六一〜一八〇年には、それぞれを単独で用いた「二行節用集」「真草増補節用集」が現れる。結局、「真草二行」は重言であり、そのような書名が付けられたことに不審を覚えるのである。

これは、あるいは、「二体」だけでは何を表すのかが分明的でないと考えた書肆が、「真草」で書体の種類を明示し、「二行」で併列表記の体裁を明示しようとしたのかもかもしれない。だとすれば、これはこれで興味深いことがらである。本来、節用集の見出しは楷書表示であつたが、先にも見たように行草書のものや、二書体併記のものも現れるようになった。この動きは、当時の実用書体である行草書を取り入れることで、購買層の拡大をはかったものとも言われる。より利用しやすい辞書への変容だが、「真草・二行」の併用も、この通俗化への一環として捉えられそうである。先に「二体節用集」に、特徴を書名に反映させようとする意識の現れを見、営利出版にふさわしい営為の一つと捉えたわけだが、同じことを見ようというのである。

さて、以上のように近世節用集の初期の書名には書体をめぐる要素が現れるのだが、それらがどのように推移したのかを示すため、表一としてまとめてみた。^(注6)ここには、右に触れなかった要素も合わせて示した。「両点」と、篆書を加え三書体表示とした「三行」である。これによれば、書体をめぐる要素は、幕末の一例をのぞけば、見事に一七〇〇年で一線を画すように使われなくなっている。ただし、その最後の二〇年である一六八一〜一七〇〇年では、実数上、直前の二〇年と見劣りはしないが、総数にしめる割合は低く、書体を表示しない書名に圧倒されている。これは、一七世紀末の節用集において、すでに二書体表示が普通のこととなつたため、セールス・ポイントとしてうたう意味がなくなつたのでもあろうが、これはいわば必要条件であつて、十分条件としては書体に代わる新たなセールス・ポイントが生じたことを考えることになる。

三 〈頭書・増補・大成〉系の時代

書体由来の要素に代わつたのは、「頭書・増補・大成」を代表とするものである。表二では、「頭書」と同じく

体由来の要素との断絶はなく、一六八〇年前後では、〈頭書・増補・大成〉などの要素と書体由来の要素とが併存する書名が見える。一六八〇年の前後二〇年間の書名を示せば、以下のようなものである。〈頭書・増補・大成〉系のいずれかと書体由来の要素とが併存するものには黒丸を付した。

一六七〇年 ● 頭書増補二行節用集・二行節用集・頭書節用集
 一六七一年 ● 増補二行節用集 一六七四年 二行節用集 一六七五年 ● 真草増補節用集
 一六七六年 ● 増補二行節用集 一六七九年 ● 頭書増補二行節用集
 一六八〇年 ● 頭書増補二行節用集・合類節用集・新刊節用集大全
 一六八一年 ● 増補頭書両点二行節用集・● 頭書増補二行節用集・二行節用集
 一六八四年 ● 頭書増補節用集大全・● 頭書増補二行節用集 一六八五年 頭書増補節用集大全
 一六八六年 頭書増補節用集大全・● 広益二行節用集
 一六八七年 頭書増補節用集大全・● 増補頭書両点二行節用集
 一六八八年 頭書増補節用集綱目・頭書増補節用集大全・龍頭節用集大全・頭書大成節用集^(注9)
 一六八九年 頭書大成節用集・頭書増補節用集大全・頭書増補節用集綱目・二行節用集
 一六九〇年 頭書大益節用集綱目・節用集*・● 大極節用集家鼎室三行綱目

このように〈頭書・増補・大成〉系の要素は、なだらかに、かつ急速に採り入れられ、一六八一〜一七〇〇年には他を圧倒するのである。ところが、次の一七〇一〜二〇年では、見る影もなく落ち込んでいる。ことに〈頭書〉系は劇的で、〈増補〉系がこれにつぐ。〈大成〉系は比較のおだやかに減少し、〈大全〉などは一九世紀以降にふたたび使用されるようになる。しかし、〈大成〉系でも、もつとも多用されたのは一六八一〜一七〇〇年なのである。このように一七〇〇年前後においては、まず、〈頭書・増補・大成〉系の要素が急速に使われなくな

表一

総数	右以外	三行	両点	二行	真草	二体	
6							~1620
9	1			2	2	5	~1640
9	9			5	6	3	~1660
16	9			10	5	2	~1680
49	46	1	2	6		1	~1700
49	49						~1720
30	30						~1740
43	43						~1760
48	48						~1780
47	47						~1800
50	50						~1820
39	39						~1840
83	82					1	~1860

表二

総数	綱目	大全	大成	増加	大増	大益	増字	広益	増補	龍頭	頭書	
6												~1620
9			1									~1640
9												~1660
16		1	12						6		4	~1680
49	9	12	12			1	2	5	27	1	36	~1700
49	2	2	15		1	1	2	6	2		3	~1720
30	1		8		1			2	2		1	~1740
43	3	4	8	1				2	1		1	~1760
48		1	2					2	1			~1780
47	1	1	1		1			1				~1800
50	1	6	4									~1820
39		8	1	2				2	1			~1840
83		11	5	1			1					~1860

ったという意味で、大きな切れ目があると見られるのである。
そこで、この急激な変化がどのようなものだったのかをみるべく、一七〇〇年前後の書名を見てみる。

- 一六九一年 頭書増補節用集大全 頭書大広益節用集
- 一六九二年 世話字節用集 頭書増補節用集大全
- 一六九三年 大海節用和国宝蔵 頭書増補節用集綱目 大広益節用集 広益字尽重宝記綱目*
- 一六九四年 頭書増補節用集綱目 頭書増補節用集大全
- 一六九五年 頭書増補節用集綱目 頭書増補節用集大全 頭書大成節用集
- 一六九六年 頭書増補節用集綱目 頭書増補節用集 大広益節用集 頭書増補節用集大成
- 一六九七年 頭書増字節用集大成 頭書大成節用集 頭書増補大節用集^(注10)
- 一六九八年 頭書増補大成節用集 頭書大成節用集 一六九九年 頭書増補大成節用集
- 一七〇〇年 新大成増字万宝節用集 頭書増補節用集大全 頭書増補大成節用集 頭書大成節用集
- 三才全書俳林節用集 一七〇一年 万宝節用集
- 一七〇三年 頭書増字節用集大成 頭書増補宝撰節用集 大節用集大家蔵+
- 一七〇四年 万世節用集広益大成 一七〇五年 頭書増補大成節用集 広益字尽重宝記綱目
- 一七〇六年 字福節用大黒袋+ 大魁節用悉皆不求人+ 大節用集新益大成+
- 一七〇七年 大広益拾遺節用集+ 一七〇八年 万宝節用集 福寿皆無量節用大成+
- 一七〇九年 世話字節用集 字林節用集拾遺大成+
- 一七一〇年 大海節用和国宝蔵+ 万金節用永代通鑑+ 立新節用和国宝蔵+ 大節用集珍開蔵+
大節用字林大成+

一見して、一七〇〇年以降の書名の要素が、それまでと大きく異なることが知られる。^(注11) もちろん、一七〇〇年以前でも「大海節用和国宝蔵」「広益字尽重宝記綱目」のように一七〇〇年以降のものに似通うものも認められるが、もとより例外とみるべきであろう。

新旧のこたを整理しながら見るとき、まず気づくのは、一七一〇年までの短い期間ながら、さまざまな要素が見られることである。^(注12) 試みに分類して示せば次のようになる。なお、複数の分類項にまたがる要素もある。

完備〈悉皆・無量・拾遺・新益〉 包蔵〈大家蔵・大海・珍開蔵〉

言語〈世話字・字尽・字林・俳林・字福〉

書名〈三才全書・重宝記・字尽・万宝・不求人・字林・通鑑・国花^(注13)〉

財宝〈万宝・宝撰・重宝記・宝蔵・万金・珍開蔵〉 福寿〈字福・大黒袋・福寿皆〉

永遠〈万世・永代〉 新鮮〈立新・新益〉 国家〈和国・国家〉

一七〇〇年までが〈二体・頭書・増補・大成〉系の要素ではほぼ尽きるのに対し、実に多彩である。右のように語義の類似でまとめたのは、そうしなければわずか一〇年間の書名要素すら、見通せないからでもある。それほどまでに多彩なのだが、財宝の項以下の要素をみると、むしろ、奔放というべきかもしれない。あえて印象的な述べ方をすれば、多彩でなければならないという熱にかかれたかのようなようであり、異様でもある。なお、このような多彩さの反面として、新しい要素は反復して使用されることが少ないことにも気づくところである。

こうした違いは、一つには、発想の違いということがある。一七〇〇年までの各要素は、辞書である節用集に直結したものであった。〈二体〉系は書体であり、〈頭書〉系はレイアウト、〈増補〉系も頭書の増補を意味する^(注14)一方で、語の増補にも用いられる。〈大成〉系も内容の完備をうたうものである。これに対して、新しい要素は、間接的ないし修辭的・比喩的である。〈大成〉系に比較的近いと思われる〈悉皆・無量・大家蔵・大

海でも、必ずしも節用集に直結するとは言えない。他の書名を流用した要素などは「もどき」であろうし、財宝・福寿の項などは言うまでもない。

以上のように、一七〇〇年の前と後の書名要素は、バリエーションのうえでは単調か多彩か、出現頻度のうえでは反復的か単発的か、発想のうえでは直接的か修辭的・比喩的か、などの点で鋭い対立を見せるのである。結局のところ、一七〇〇年前後を境にして、簡素から複雑への大きな転換が認められるということである。

おわりに

以上のことから、書名によって時代を区分するとき、『二体節用集』の出現した元和・寛永ごろと一七〇〇年前後は、重要な意味を持つものと考えられた。この二つのあいだをさらに区分するならば、当然下位区分になるが、『二体』系と『頭書・増補・大成』系との境界が注目される。が、両者の移行はゆるやかだったので切れ目を入れにくい、一六七〇年から一六九〇年あたりまでを移行期とすることになろうかと思う。

今後の課題について一・二、触れておく。まず、簡素が典型であった時代には「大極節用国家鼎宝三行綱目」などは逸脱と映る。このような関係は、佐藤（二〇〇〇）をものしたものであるところだが、他の時期の逸脱と合わせて別途扱うこととしたい。また、一七〇一年以降については、対象年代を大幅に拡大した検討と、それにもとづく本稿の検証が必要であろう。その折りに、多彩さの要因にも触れる予定だが、教養記事的な付録の増補と版權の公認などに言及することになろう。また、注3にも触れたように、佐藤（一九九六）の書名一覧の整備も重要な課題とと思っている。

注

(1) 以下、書名は鍵括弧で、書名中の要素は山括弧で包んで示す。なお、書名によってその節用集の書籍としての実体をさす場合は、二重鍵括弧で示す。

(2) たとえば、柏原司郎（一九七四）は、見出し間の境界表示のあり方を検討しており、先進的である。

(3) 佐藤（一九九六）と同様に通し番号を付してしめす。当該刊行年の最後に配し、直前の番号に枝番aを添えたものである。二四二a 新增早引節用集（安永四年刊 佐藤蔵）。〇八八a 頭書増補宝撰節用集（元禄一六年刊 佐藤蔵）。〇七八a 頭書増補大節用集（元禄一〇年ごろ刊 米谷隆史氏蔵）。〇五三a 頭書大成節用集（元禄元年刊 『福地書店目録』一九九九年七月）。〇七六a 頭書増補節用集大成（元禄九年刊、同）。なお、逆に、一覧から除くべきものが延べ二〇本ほどあるかと思う。たとえば『世話字節用集』は世話字集の一つとして、『童子字尽安見』とその再版本等は語彙集型往來の集大成として見るべきかと思う。これらを含めたのは、漏れを恐れて基準をゆるめたからにはかならない。この種の問題は、節用集の定義とかかわって、重要かつ厄介である。いま、拙速をさけ、また、本稿の範囲では重大な過誤を招かないと判断し、削除せずに用いた。

(4) 書名には、たとえば「真草二行節用集」ならば「真字（楷書）と草字（草書）を二行に表示した」といった、要素間の文法的関係がありそうである。が、本稿では、そうした関係は参照するにとどめ、要素単体を中心に扱う。もとより、このような扱い方が最善とは思っていない。

(5) 『大漢和辞典』の「二体」では「二つの体裁」「歴史の二つの体」（編年体と紀伝体）「文・武の舞をいふ。一説に、陰陽の声」との語釈を載せるが、特に二書体を示すものはない。

(6) 左端の総数欄には、二〇年ごとに刊行された節用集の総数を記した。また、「真草二行節用集」のように、横軸の要素を二つもつ書名では、それぞれに一本と数えた。このため、この本数の合計と総数とが一致しない場合がある。なお、表二も同様である。

(7) 「増補」と類義の要素に「新增・新益」があるが、「新」字を有する点、一七〇一年以降にあらわれる点で異質と見、ここには含めない。なお、それらの要素を含む書名とともに四本しかない。

- (8) 〈綱目〉には、〈大全・大成〉のような集大成の語義は必ずしもないであろう。が、「大綱と細目」(大漢和辞典)と訳されるように組織の整備を含意するとも考えられ、〈大全・大成〉に近い部分があるようである。また、表二でも、一八世紀までは〈大全・大成〉とほぼ同様に推移するので、ここに含めた。
- (9) アステリスクは、当該書を佐藤が実用していないなど、確認を要することをしめすものである。
- (10) プラスの印は、脱落などのため、刊記による刊年の特定ができず、付録記事中の年記によったことを示すものである。なお、佐藤(一九九六)で『大万宝節用集増字大成』を付録記事により元禄一六年に配したが、米谷隆史(一九九七)の注4の指摘により、宝永年間の最後に回したので、ここには示していない。
- (11) 佐藤(一九九六)で指摘したように、一七〇一〜二〇年には、刊記の脱落のため刊年がわからず、付録記事中の年記によったものが多い。そのさまを一〇年単位に示せば表三のようになるが、一七〇一〜一〇年が際立っている。そこで、刊年を付録記事中の年記によったために、偶然この一〇年間に集中したことも考えられ、その影響で一七〇〇年前後から書名要素が急変するように見えるおそれがある。が、付録記事によったものは、宝永七(一七二〇)年に五本、正徳四(一七一四)年に四本が集中するほかはほぼ散在するので、この点についてはさほど重視しなくてよいと思われる。

表三

	刊記による	
	21	〜1690
	27	〜1700
	6	〜1710
	18	〜1720
付録による	16	〜1730
1	14	9

- (12) 語義が捉えにくいため〈大魁〉は類別しなかった。書名要素にふさわしい語義をひろえば、「その物事が、並はずれたスケールの大きさを誇るさまであること」(時代別国語大辞典 室町時代編)、「大勢力の頭目。巨魁」(科

挙の試に於ける、殿試の最優秀合格者」(大漢和辞典)、「心の広いこと。心がけやおこないなどが立派であること。偉大であること。また、そのさま」(質や量が相応していること。ふさわしいこと。また、そのさま)(日本国語大辞典)などがある。一方、頭書を有する本を「魁本」とも称するので、これを踏まえての新語かもしれない。なお、『世話字節用集』については注3に示したような問題があるが、掲げておく。

- (13) 固有名とはかぎらない〈字尽〉をのぞけば、それぞれ、王圻『三才図絵』(一六〇七年成)、『家内重宝記』(元禄二年刊)・『重宝記大全』(元禄四年刊)、菊木嘉保『万宝全書』(元禄七年刊)、『不求人』、吕忱『字林』、司馬光『資治通鑑』(一〇八四年成)・朱熹・趙師淵『資治通鑑綱目』、『国花集』(寛永五年刊)などが典拠か。なお、以上は例として挙げたままで、他書が典拠である可能性を排除しない。

- (14) 高梨信博(一九九二)も『頭書増補二行節用集』で増補された〈頭書〉が『二行節用集』にはない」と表現するので、頭書の増補ととっているようである。

参考文献

- 柏原司郎(一九七三)『二体節用集(横本)の板種について』『語学文学』一一
 柏原司郎(一九七四)『近世初期「節用集(横本)」の改板例(下)』『野州国文学』一一三
 柏原司郎(一九七七)『縮刷本節用集の性格について』浅野信博・古稀記念国語学論叢刊行会編『国語学論叢』校楓社
 佐藤貴裕(一九九六)『近世節用集書名変遷考―資料篇・付言―』『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』四四―二
 佐藤貴裕(二〇〇〇)『節用集の世界 典型と逸脱』『月刊しにか』一一―三
 高梨信博(一九九二)『近世前期の節用集―四十七部非増補系諸本の系統関係―』辻村敏樹教授古稀記念論文集刊行会編『日本語史の諸問題』明治書院
 山田忠雄(一九六四)『草書本節用集の版種』『ビブリア』二九
 米谷隆史(一九九七)『元禄期の節用集について』『語文』(大阪大学)六九

後記

東北大学附属図書館所蔵の近世節用集には、狩野文庫本にくわえ、佐藤喜代治先生の御指示のもと、収集実務につき前田富祺先生の御担当なさったものがある。この集書の一冊一冊に接するとき、狩野文庫本の欠をおぎない、近世節用集の諸相を可能なかぎり示そうとされた御配慮を感じずにはいられない。思えば、佐藤が、節用集をみる視点・スタンスを学び、その研究をこころざしたのも、ひとえに、このように充実した環境を整えていただいたからにほかない。この御学恩に謝意を表すべく、拙いながらも本稿を捧げる次第である。

『国語彙史の研究』 発刊に際して

戦後、国語史の研究は各分野にわたって著しく進んできた。次々と新しい文献・資料の紹介も行われ、それらについての研究も数多く発表されている。しかし、国語彙史の研究は、音韻史や文法史の研究に比して、やや立ち遅れているように思われる。もともと国語彙史にかかわる研究論文の数は必ずしも少ないわけではない。ただそれらを国語彙史としてどのように体系的にまとめてゆくかということになると、なお考えるべき点が多いように思われるのである。

そのような状況の中で最近になっていくらか様相が変わってきた。国語彙史としてまとめることを目標としているような著書・論文も出てきている。国語彙史の研究は、新たな進展の時を迎えているといえよう。そこで、私も国語彙史の研究に関心を持つ者が集まって、昭和五十四年春、国語彙史研究会を始めることにした。幸い、心ある方々の力添えをいただき、ささやかながら関西を中心として研究会を開いてきた。そしてそのような研究会の活動の中で、論文集を出そうという気運がもりあがってきた。研究会に参加しているものを中心に、各地の国語彙史の研究に関心を持っておられる方々の参加をえて、ここに『国語彙史の研究』の発刊を見るに至ったのである。

国語彙史の研究自体が、会則などのない、開かれた、自由な会である。参加している人の考え方も、国語彙史に関心を持っているということとは共通としても、様々である。本論文集も研究会と同様に、いろいろな考え方の、いろいろな分野の研究の発表の場となることを期待している。研究会ともども時には厳しく、時には暖かく見守っていただきたいと念願する。

昭和五十五年三月

国語彙史研究会幹事

根 来 司
前 田 富 祺
山 内 洋 一 郎

(注) その後、平成八年十一月に会則を、平成十年十二月に投稿・編集規程を制定するに至った。

国語彙史の研究 二十

平成十三年三月二十日初版第一刷発行

(検印省略)

編 者 国語彙史研究会
発行者 廣 橋 研 三
印刷所 日本データネット
製本所 大 光 製 本 所
発行所 鶴 和 泉 書 院
〒543-0002 大阪市天王寺区上汐五-3-18
電話 〇六-六七七一-四六七
FAX 〇六-六七七一-五〇八
振替 〇〇九七〇一八一五〇四三

ISBN4-7576-0102-6 C3381